

『南山神学』43号(2020年3月) pp.99-124.

児童学者・関寛之の生涯

—宗教性発達研究の先駆者の生涯—

西脇 良

はじめに

大著『日本児童宗教の研究』で知られる児童学者・関寛之(1890—1962¹)は、出身地である長崎県雲仙市小浜町(2005年の7町合併以前は同県南高来郡小浜町)では、2人の兄弟、すなわち、兄の衛(児童画研究, 1889—1939), 弟の敬吾(民俗学・昔話研究, 1899—1990)と共に、「関3兄弟」の一人として知られている人物である。現在、寛之の生家には「関3兄弟の功績」と題された看板が設置されており、小浜町教育委員会が1999年に発行した『おばま 史跡巡りガイド』にも史跡として「関3兄弟生家跡」が紹介されている²。

このように地元では名士の一人に数えられている人物であるが、彼自身東京での生活が長かったことや、彼を直接よく知る人々も少なくなってきたこともあり、その生涯の細部についてはよく分かっていない。そこで本稿では、寛之自身が作成した履歴書³(以下「寛之履歴書」)、彼自身が編纂し直した『関

¹ 『日本心理学者事典』(大泉溥編, クレス出版, 2003年)の「関寛之」の項をみると、見出しの没年は「1963年」であるが、文中では「1962年(昭和37)」となっている。本稿では他の資料(後出『小浜史談』等)より、没年を1962年とする。

² 1978年発行の町史『小浜町史談』(小浜町史談編纂委員会編)には敬吾と寛之のみが紹介され、「3兄弟」の呼称も見当たらないことから、衛を加えた「関3兄弟」という呼称が定まってきたのは、この年以降、かつ最近である可能性がある。小浜町史談編纂委員会(編)(1978)。小浜町史談 小浜町

³ 向野康江(1994)の博士論文に資料として複写版が掲載されている。手書きである。1949年3月の記載が最後であるため、この頃に作成されたものと考えられる。向野康江(1994)。関衛研究：関衛(せき・まもる, 1889-1939)と大正期芸術教育思想の展開 筑波大学(未公刊)

家系譜』⁴、著書の序文や雑誌記事、勤務校であった東洋大学の校史などをもとに、その生涯を素描してみたい⁵。これにより、戦前に児童の宗教性発達研究を牽引していた関寛之を、研究史上に位置付けるための基礎的資料としたい。

寛之の生涯は大きく3つに区分することができる。幼少の頃から地元長崎の雲仙・小浜で過ごした「小浜時代」の18年間（1890—1908年）、上京して東洋大学に学び、結婚し、東洋大学に職を得て研究と教育に心血を注いだ「東京時代」の36年間（1909—1945年）、そして戦争疎開という形で再び小浜に戻り、地域に貢献した「小浜時代Ⅱ」となる17年間（1945—1962年）である。72歳の生涯のうち、半分を小浜で、半分を東京で過ごしたことになる。偶然とはいえ、東京での36年間を、それとほぼ同じ期間となる小浜での生活が包み込むかたちとなっていることも、示唆的といえる。以下、彼の生涯を、長期に及ぶ「東京時代」をさらに東洋大学教授就任の前後で区切ったうえで、概観してみよう。

1. 幼少期から上京まで（1890—1909年）

寛之は、父^{さんじ} 倅治、母タダシの四男として、1890年12月3日、長崎県南高来郡小浜町富津（現雲仙市小浜町富津）で生まれた。富津は小浜町の北部に位置し、橘湾を臨む漁村として栄えていた。父倅治（1855—1918）は、同県同郡北有馬町出身で、関家本系譜・第7代寛平（1833—1905）の養子となり、関家第8代を継ぎ、第2代五郎兵衛（?—1759）の時に創始された漁業を引き継いだ網元であった。地元の寺の檀家総代、村の収入役および村会議員も務めた。母タダシは、第七代寛平の先妻イマの娘であった。夫^{さんじ} 倅治の死後も、子らに代わり家業をよく支えたという。

寛之には3人の姉^{きよき}（喜代亀、千里、マツル）、2人の兄（一男、衛）、3人の妹（ヨシエ、チヨ、養女アヤ）、1人の弟（敬吾）がおり、10人きょうだいであったが、寛之が生まれた年に3人の姉はすでに他界していた。寛之が3歳のとき

⁴ 寛之による手書き資料である。2013年に筆者が入手したコピー資料を使用する。

⁵ 最近、『日本児童宗教の研究』の直筆原稿が見つかったとの情報が、寛之の兄・敬吾氏の御子息（信夫氏）からもたらされた。直筆メモ等も残されている可能性がある。

に妹・ヨシエが、また6歳すなわち小浜村立富津尋常小学校に入学した年に妹・チヨが生まれ、さらに小学校3年の年には弟・敬吾が生まれている。

寛之の幼少時代を直接知る手がかりはないが、弟・敬吾の回想から推量することが出来る。敬吾は民話研究の第1人者であるが、その著『島原半島民話集』⁶の中で、その書に収められている昔話の大部分が小浜町富津で採集されたものであること、その中には幼少時に母親（タダシ）から直接聞いたものが含まれていること、にふれている（310-313頁）。このエピソードから、寛之もまた、その幼少時代、母親から富津に伝わる民話を語り聞かせてもらいながら育った、ということが推量されよう。

さらに、幼少期における兄・衛との関係、また学生時代の父・^{さんじ}修治との関係についての興味深いエピソードが、雑誌『婦女界』に掲載された子育てに関する誌上座談会の記事（寛之49歳）にみられる。里子に関する話題が進む中、次のように述べられている。

「私はすぐの兄と一つ違いに生まれまして、兄が里子にやられたんです。それから後でまた伯父の家に預けられたんです。それが小学校にはいるので家に戻されたのですが学校へ行くと出かけて、途中から三里ばかり離れている育った伯父の家へ何度か逃げ帰ったか知りませんでした。それに私はなんだか兄のような気がしないのです。友達か奉公人かに見えました。私共の小学校時代はお習字の紙を前の日に折っておいたものですが、私は何時も兄を使って折らせたのです。他所から来た者という感じがあったのですネ。（笑声）今は悪かったと思いますが、終いまで母親に懐きませんでした。里子は不可ない、やっぱり子は母が育てるべきものです。』⁷

⁶ 関 敬吾（1977）．島原半島民話集 白田甚五郎ほか（編）全国昔話資料集成12 岩崎美術社

⁷ 都築益世・関 寛之ほか（1939）．数人の子を育てた方々と小児科医・児童教育家が上手な育児法と躱け方を語る会 婦女界 59（6）,（p.160）

「それに、こういう経験も私持っております。十三、四の頃でしたか、その兄の方が私よりお習字が上手だったのです。父が『お前は兄のように書けない、駄目だ。』と申しましたが、それを何時までも不快に思って忘れませんでした。それに父と兄に敵愾心を感じました。十歳かそこらより前なら大したことはないのですが、青年期に近い頃からの感情問題は解けません。それで十三四から後に叱ったり注意したりすることは頗る細心でなくてはいけないと思います。』⁸⁾

文中の「兄」は三男・衛をさすが、まさにこの記事が発行された1939年、衛が50歳の若さで逝去している。衛が亡くなったのが3月、雑誌の発行月が6月であるので、座談会の開催の頃にはその訃報に接した可能性が高い。また、衛と父・惨治に対して「敵愾心」を抱いていたことも、寛之の人間味を示す数少ないエピソードとして注目される。

さて、10歳で尋常小学校を卒業（当時は修業年限4年）した寛之は、引き続き修養年限4年の富津高等小学校に入学し、1904年に首席で卒業した。尋常小学校の准教員の資格を得て、翌1905年、1年間准訓導として勤務した後、長崎県立長崎中学校に首席入学を果たした。

順風満帆に行くかに見えた学業の道であったが、長崎中学校に入学した1906年から数年間、足踏みが続くことになる。まず、中学1年生の10月に同校を「病気退学」してしまう。病名は定かではないが約1年半のブランクが続いた。その後、奈良県立農林学校（寛之履歴書には「奈良県立吉野農林学校」とある。現奈良県立吉野高等学校、1908年、寛之18歳）、麻布獣医畜産学校獣医科（現麻布大学、1909年、寛之19歳）にそれぞれ入学するのだが、前者は入学せず、また後者も10月頃に退学してしまうのである。詳細については不明である。進路選択に迷いが生じた時期であったのかも知れないし、病気からの快復が思わしくなかったのかも知れない。いずれにせよ、前途洋々であったはずの青年期

⁸⁾ 前掲書 (p.160)

に、三度にわたり入退学を繰り返した時期があった、ということは記憶にとどめておく必要がある。

2. 上京から東洋大学教授就任まで（1909年—1924年）

寛之の履歴書には1909年に麻布獣医畜産学校獣医科に入学したことが書かれているので、少なくともこの年までには上京していた可能性がある。そして、同校を10月に退学した翌1910年、「東洋大学東洋倫理文学科⁹」（当時は「私立東洋大学専門部第二科」）へ聴講生として入学し、翌1911年に「専門部第二科」に入学、1914年に卒業した。

専門部第二科のカリキュラムは「国語・漢文を中心に専攻させ¹⁰」るものであった。寛之が履修した科目と推定される「専門部第二科改正学科課程表¹¹」をみると、たしかに国語系の科目と漢文系の科目が多い。年間27～28の授業時数のうち、国語系（古典や文学史等）と漢文系（孔孟老荘や漢詩等）が各8、合計16ある。学生時代を回想した彼の文章¹²に、「教室の講義は吾々の唯一の目標であった」（p. 28）という記述があり、勉学にひたすら打ち込んでいた彼の姿が想像される。

後に彼が国語および漢文から心理学へと専門分野を変更するきっかけとなっ

⁹ 寛之の学生時代（1910～1914年、聴講生時代を含む）、東洋大学には1905年の学則改正により「大学部」（修業年限4年）と「専門部」（修業年限3年）が置かれ、それぞれに第一科と第二科が設置されていた。寛之は3年間で卒業しているので、「専門部」に在籍していたのであろう。大学時代を回想した『母校の憶出』（関、1933）の中で、自身について「僕は専門二科にいて常に奮慨した仲間であるが」との記述があり、ここからも専門部二科に在籍していたことが分かる。なお、東洋大学は1921年に再び学則改正を行い、専門部第一科は「倫理学教育学科」、同第二科は「倫理学東洋文学科」に、それぞれ名称変更がなされた。1921年以降も何度も学則改正を重ね、学科の新設や名称改称を行っている。寛之が履歴書を書いたのは戦後であり、卒業から35年以上が経過している。こうしたことから、寛之が記憶を辿る際に、この1921年の改正における「倫理学東洋文学科」を「東洋倫理文学科」としてしまっただけではないか、と考えられる。

¹⁰ 東洋大学創立百年史編纂委員会（編）（1993）. 東洋大学百年史 通史編 I 東洋大学（p. 590）

¹¹ 前掲書（p. 589）.

¹² 関寛之（1933）. 母校の憶出 東洋大学学友会雑誌部（編）『東洋大学と学祖井上先生』東洋学苑特別号 東洋大学学友会雑誌部（pp. 27-30）

た児童心理学者・高島平三郎（1865—1946）との出会いは、寛之が大学1年生の時であった。高島は1906年から東洋大学心理学教授を併任していたが、第1学年で履修する教育系の科目「心理学」を担当しており、これを受講していた。上述の回想に以下のように記されている。

「心理学の高島教授の講義は欠かさず出た。一年の時に同教授から指示された児童心理学の精読が僕の今日を決しようとは思いがけなかった。同教授は私宅でもよく学生の面倒を見られた。」¹³

心理学への転向は難解な中国古典にもあったようだが¹⁴、高島の講義を通して心理学に少なからぬ関心を持つようになったと考えられる。高島は、松本孝次郎（1870—1932）と塚原政次（1872—1946）と共に『児童研究』を創刊（1898年）したり、『児童心理講話』（1909年）や『教育に応用したる児童研究』（1911）を著したりするなど、その頃の児童学をけん引しており、寛之が児童研究に開眼していったのも自然の流れといえるだろう。

寛之の最初の著作となる『児童学概論』（1918年）には、同書の校閲を引き受けた高島平三郎の序文が掲載されており、その中で学生時代の寛之にふれている箇所がある。

「関寛之氏は篤学とくがくの人である。曾かつて東洋大学に在学中より児童の研究に多大の興味を有し課業の余暇小学校の児童等に就いて種々の実験や観察を試みて居たが卒業後益々其の歩を進め是等これら実際の研究を怠らざると共に各国の文献しょうりょうを渉獵あつして其の資料あつを蒐め終に困難なる児童学の組織を成就するに至った。」¹⁵

¹³ 前掲書（p. 29）。

¹⁴ 前掲書（p. 29）に「注釈と暗記に弱らされて僕は心理学に転じてしまったが」とある。

¹⁵ 高島平三郎（1918）. 序文 関寛之 児童学概論 洛陽堂（pp. 3—4）

この記述からは、寛之が在学中すでに高島の指導のもと、児童を対象とした実験観察を行うなど、児童研究にかなり積極的に関与していたことがうかがえる。

また寛之は、在学中に二人の兄を病気で失っている。1912年に次男・二扇（享年31歳）、翌年1913年には長男・一男（享年34歳）に次々と先立たれた。この出来事は、その後の不幸（後述）とも相まって、宗教心理学への関心の端緒となったと考えられる。

1914年に東洋大学を卒業し、1924年に同大学に迎えらるまでの10年間、寛之は神代尋常高等学校の代用教員（1914—1915年）、出版社有朋堂の編集部員（1916—1918年）、出版社洛陽堂の編集主任（1918～1921年）¹⁶、東京府女子師範学校・第二高等女学校の講師（1921～1924年）の職を得て生計を立てながら、児童および宗教に関する研究を深めていった。寛之履歴書に以下のように記されている。

「東洋大学卒業後——心理学，特に児童心理学専攻，後に宗教心理学及び宗
 教学専攻，終りに児童宗教を専攻す——児童心理学は特に高島平三郎氏に
 つき，宗教学は特に姉崎正治氏につき，東京帝国大学宗教学講座を中心と
 して専攻す」

この期間、寛之は前出の『児童学概論』（1918年）を皮切りに研究書や啓蒙書を次々と出版している。高島から引き継いだ玩具研究をまとめた『父母と教師のための玩具と教育』（1919年）¹⁷、『輓近の児童研究』（1919年）¹⁸、『児童学要領』（1922年）¹⁹など、その数は10余に及ぶ。

中でも注目されるのは、1920年に出版された『児童学に基づける宗教教育及

¹⁶ 洛陽堂と寛之を繋いだのは、師である高島平三郎であったと推測される。田中英夫(2016)．洛陽堂河本亀之助小伝 燃焼社 (pp.544-546)

¹⁷ 関 寛之 (1919)．父母と教師のための玩具と教育 洛陽堂

¹⁸ 関 寛之 (1919)．輓近の児童研究 洛陽堂

¹⁹ 関 寛之 (1922)．児童学要領 洛陽堂

日曜学校』²⁰である。この書は、児童期の宗教性を扱った彼の最初の著作であるが、その序文に、彼がなぜ児童の宗教性を研究しようと考えたのか、その理由が記されている。在学中に二人の兄を亡くしたことは前述の通りであるが、じつは寛之はその後も 1916 年に妹のチヨ（享年 21 歳）を、そして 1918 年には父・^{さんじ}俊治を失っている。序文には、次々と 4 人の肉親を失った悲しみが綴られたのち、次のように記されている。

「これを見かれに対して、私の胸中に湧いたものは、涙でもなく、不運の歎きでもなく、浄き宗教の泉でありました。それは佛教でもなく、基督教でもなく、若し言葉を以て表わすことが出来ましたなら、形式の宗教に未だはいらない、宗教の核心でありました。私が自分の専門とする児童学に於て、子供の宗教心を、死せる分析的な研究ではなく、活きた全体としての実体を研究してみたいと思うに至った動機は、…故意に経験しようとしてもすることの出来ぬ、悲しい経験に原づいているのであります。²¹」

さらに追い打ちをかけるように、この序文の原稿を書き終える直前、姪の綾子（兄・一男の養女）の訃報に接したことも、同序文に綴られている。

このように、在学中より経験せざるを得なかった、度重なる肉親らとの死別が、寛之をして宗教性への関心を引き起こせしめた。卒業後、姉崎正治（1873—1949）に就き東京帝国大学の宗教学講座に出席していたことは前述の通りである。しかもその探究は、当時産声をあげたばかりの児童学に対する関心と相まったかたちで、そしてこれまで蓄積してきた児童研究に立脚するかたちでなされたために、その後の主要な研究テーマとして「児童の宗教心」へと拓かれていった、ということであろう。

なお、『児童學に基づける宗教教育及日曜学校』を出版した 3 年後の 1923 年、更なる不幸が寛之にふりかかる。1917 年に結婚した妻シズヨとの間にもうけた

²⁰ 関 寛之（1920）．児童學に基づける宗教教育及日曜学校 洛陽堂

²¹ 関寛之（1920）．児童學に基づける宗教教育及び日曜学校 洛陽堂（pp.4—5）

長男・隆が、出生のわずか三日後に亡くなったのである。この経験²²もまた、彼を児童の宗教心理の研究へといっそう駆り立てるものであったに違いない。幾多の試練の中にあっても寛之の学究心が衰えることはなく、かえってますます、児童学の体系化と同時に、児童の宗教性に関する実証的研究へと広がっていく。そしてこうした努力の結果、彼は1924年5月、東洋大学に教授として迎えられることとなった。

3. 東洋大学時代（1924年～1945年）

母校・東洋大学に職を得てのち²³、1945年に戦争疎開というかたちで辞職するまでの約20年間は、寛之が研究者としても、教育者としても、さらには教育評論家としても最も活躍した時代である。この期間、確認されただけでも27冊の著作が出版されており、関連する論文数も30余りに及ぶ。大学では、担当講

²² 長男・隆の死を悼んだ歌（「今日もまた亡き子の床をいとほしみ侘しく對ひぬ若き父母」等4首）が、死の2ヶ月後に出版された『最近児童心理学概論』の序文に添えられている。関 寛之（1923）．最近児童心理学概論 中文館（p.10）．寛之には、長男・隆のほか、養女に迎えた俊（兄・一男の娘）、養子に迎えた巖（知人・村山喜一郎の四男）の3人の子がいたが、隆に加え、養女俊も1932年に21歳で逝去してしまう（寛之43歳）。このことを後になって寛之は、雑誌『婦女界』の紙上座談会で次のように振り返っている。「私は姪と三人育てました。長男と姪とは亡くしましたが、子供を亡くした当座は衝撃の大きいためか左程悲しいとは思いませんが、後で破った障子を見たり、持ち物を始末したり、遺品に触れたりする時、なんとも言えなく悲しくなりますネ。」都築益世・関 寛之ほか（1939）．数人の子を育てた方々と小児科医・児童教育家が上手な育児法と躾け方を語る会 婦女界 59（6），（p.156）

²³ 東洋大学就職後も、他校、すなわち東京女子商業学校（日本女子商業学校〔現・喜悅大学〕か。1926～1929年在職）、千代田女子専門学校（現・武蔵野大学。1927～1945年在職）、実践女学校専門学校（現・実践女子大学。1927～1930年在職）、昭和保姆養成所（東京昭和保姆養成所。1928～1934年在職）、大妻女子専門学校（当時は私立大妻実業学校〔現・大妻女子大学〕。1928～1945年）、日本大学（1932～1945年）、中野保姆養成所（現・こども宝仙教育大学。1935～1945年）、でそれぞれ教鞭をとっている。なお、『東洋大学百年史 資料編I下』（東洋大学創立百年史編纂委員会編、1993年）によると、専任教員としての最古の記録があるのは「東洋大学 予科」に記載があるのみで、日付は「1936年4月20日」となっている。「東洋大学 専門部」にも兼任教員として記録があるが、こちらには「本務の職業 千代田高等女学校」と記載されている。東洋大学創立百年史編纂委員会（編）（1993）．東洋大学教員調査事項報告書控〔昭和11年5月28日〕東洋大学百年史 資料編I下（pp.66-83）

義のほか、当時国内でも先駆となった「臨海学校」の指導の任に当たっている。さらに、児童学の専門家として新聞、雑誌に投稿したり、ラジオ番組への出演も行ったりしている。

一方、この時期は家族内でも様々な出来事が起こった。まず家庭では、長男・隆の死後、養女および養子を迎えることとなった。1924年には兄・一男（1913年逝去）の娘であった俊（当時13歳）を養女に、1930年には友人の仲介により、京都府土木部長であった村山喜一郎の四男・巖（当時5歳）を養子に、それぞれ迎える。一男一女を迎えるかたちになったが、俊のほうは1932年に21歳の若さで逝去している。次には、母と兄との死別があった。俊の逝去と同じ年、寛之の母タダシを73歳で、さらに1939年には兄・衛を49歳の若さで、それぞれ亡くしている。

とくに母の死は、寛之にとって影響が大きかったに違いない。母の死から5年後の1937年に出版された『我子の教育』の序文には、母の死後、母の字で書かれた^{へそ}臍の緒書きを見つけて涙したエピソードが感傷的に記されている。

「昨年の暮、新しい年を迎えるべく、書斎を何くれとなく片付けていると、古びた布呂敷に何か包んだものを見つけ出したので、取り出して開いてみると、中からお家流で書いた小さな紙包が出てきた。不思議に思って読んでみると、母の手蹟^{しゆせき}で書かれた自分の^{へそ}臍の緒書きであった。万感迫るままに、『すすきはきや臍の緒書きの筆の跡外は氷雨か四十路のくれ』と詠んでみたが、余り親に孝行をしなかった過去が思い出されて、涙のみが^{しき}連りに流れた。²⁴」

本項では以下、研究者、教育者、教育評論家としての寛之の活動をそれぞれみていきたい。

²⁴ 関 寛之（1937）．我が子の教育 婦女界社（はしがき p.1）

3. 1. 研究者として

1924年、34歳で東洋大学教授に迎えられた寛之であるが、すでに数々の著作出版により児童学における気鋭の研究者として名を知られていたようである。たとえば、国内初の週刊教育新聞となった『教育週報』には、「児童学の新進」として人物紹介がなされている²⁵。また、教育史家・藤原喜代蔵の『明治大正昭和 教育思想学説人物史』では、「心理学者として異色の存在」「児童の宗教教育については一方の権威」と紹介されている。

「東洋大学教授関寛之も、心理学者として異色ある存在である。彼が、師高島平三郎の後継者として、心理学の一般普及のために、どれだけの業績を挙げるかは、未知数であるが、児童の宗教教育については、一方の権威として認められている。波多野完治は、書店巖松堂の忝であるが、関は洛陽堂や有明堂などの書店に関係し、編纂事業に従事したことがある。東洋大学で教育、国語、漢文を専攻し、文章も相当達者だから、波多野とともに、新聞雑誌界に登場するジャーナリストでもある。学者ぶらず、人さわりのよい点も、波多野と同様である。²⁶」

ピアジェ研究で知られ、日本を代表する心理学者・波多野完治（1905～2001）と並び称せられているところにも、その活躍ぶりがうかがわれる。

寛之の専門を何とするかについては、「児童学」、「心理学」、「宗教教育」と、外部からの評価にある程度の揺れ幅があったことは事実である。ただ寛之自身は、あくまでも「児童学」に立脚していたようである。『児童学原論』（1927年）の序文に、次のようにある。

「本書は…余の専門学に関する体系を示すためのものである。…余の体系を

²⁵ 人物の片影 教育週報 1929年4月13日 (p.4)

²⁶ 藤原喜代蔵 (1934). 明治大正昭和 教育思想学説人物史 第四巻 昭和前期篇 日本経国社 (p.608)

示すための書は未だ決して児童学の範囲を踏出したことはない²⁷⁾

そして、彼自身初の著書となった『児童学概論』(1918年)を起点として、続く『児童学要領』(1922年)、『児童学原理』(1924年)と改訂を重ね、この『児童学原論』に至ったが、それでも未だ完全ではない、という²⁸⁾。また事実、『児童学原論』出版の7年後には、最新の研究成果を加えた増訂版が出版されている。児童学の体系化を目指して版を重ね続けたことから、寛之には、自分の学問上の立脚点はあくまでも児童学である、という意識が常にあったのではないかと考えられる。

と同時に、『児童学に基づける宗教教育及日曜学校』(1920年)の出版以降は、児童学に立脚しつつ、児童の宗教性発達に焦点づけられた研究を行う、という独自の研究スタイルが定着していった。著作にもそれが表れており、「児童学」(また「児童心理学」)の名を冠する著作群と、「宗教」を冠する著作群とが並行して出版され、そこに「玩具」を冠する啓蒙書が加わるかたちになっている。この時期に出版された著作を示すと、Table 1の通りである。

寛之が多作であったことは当時から知られていたようで、『児童学原論』(1927年)の序文に弁明がなされるほどであった。それによると自身の著作には、純粹に学問の体系化を目的とするものと、読んだ専門書を自分なりにまとめ、それを後で自身でも読み返すことができるよう書き貯めていき、(いわばその副産物として)著されるものに分かれており、そのため、結果として著作数が多くなってしまいうらしい²⁹⁾。

いずれにせよこの時代の著作群からは、寛之の研究姿勢として、第1に、師である高島平三郎の門下として児童学の体系化に努めると共に、関連分野として心理学および児童心理学にも学究の範囲を広げていたこと、第2に、独自の研究テーマとして児童期の宗教性発達(児童の宗教心)を設定し、深めていく

²⁷⁾ 関 寛之(1927). 児童学原論—児童の身体及精神 東洋図書(緒言 p. 2)

²⁸⁾ 以上、前掲書(緒言 pp. 1-4)

²⁹⁾ 前掲書(緒言 pp. 1-2)

Table 1 関寛之の著作リスト（東洋大学時代、1924年～1945年）

出版年	種別	タイトル（出版社・出版月）
1924	児童学	児童学原理—児童の身体及精神（アテネ書院・10月）
1925	児童心理学	最新児童心理学（廣文堂・4月）
	児童心理学	学校児童心理学（改造社・5月）
	宗教性発達	児童の宗教心理（宗教教育叢書10）（仏教芸術社・8月）
1926	玩具研究	玩具と子供の教育（廣文堂・12月）
	玩具研究	我子のおもちゃ（文化生活研究会・2月）
1927	心理学	心理学原論（厚生閣・3月）
	心理学	運動心理学提要（大正書院・6月）
	児童学	児童学原論—児童の身体及精神（東洋図書・10月）
1928	心理学	高等教育心理学（東洋図書・4月）
	宗教性発達	児童の宗教意識（宗教教育講座13所収）（大東出版社・7月）
1929	宗教性発達	児童の宗教心理及教育（廣文堂・4月）
	宗教性発達	児童宗教教育（東洋図書・5月）
1930	児童心理学	高等教育児童心理学（東洋図書・3月）
	玩具研究	玩具と子供の教育 改訂再版（廣文堂・10月）
1931	児童心理学	教授の実際に応用したる児童心理学（文化書房・9月）
1932	児童心理学	訓練及管理の実際に応用したる児童心理学（文化書房・12月）
	宗教性発達	児童の宗教意識（宗教生活叢書13所収）（大東出版社・10月）
1933	宗教性発達	宗教意識の発達における児童の秘密性について（日本宗教学会編『日本の宗教学』所収）（大東出版社・12月）
	児童学	児童学原論—児童の身体及精神 増訂版（東洋図書・2月）
1934	宗教性発達	訓育及保育の基礎たる宗教（大倉広文堂・5月）
1938	宗教性発達	日本宗教教育（東洋図書・10月）
1940	玩具研究	玩具・絵本及読物（厚生閣・5月）
1941	児童心理学	幼児心理学（児童心理学大系・純正児童心理学1）（東洋図書・9月）
1944	宗教性発達	日本児童宗教の研究（彰考書院・11月）

（雑誌掲載論文等を除く）

と共に、それを宗教教育論にまで範囲を広げていたこと、第3に、同じく師・高島平三郎の玩具研究を継承し、玩具が児童の発達に与える役割を児童学・心理学の観点から明らかにしようとしたこと³⁰、が特徴として挙げられる。

なお寛之には、「本能」に関する哲学的、生物学的、心理学的考察を行った『教育の基礎としての本能』³¹、1938年の文部省小学校令施行規則改正における、

³⁰ 寛之の玩具研究について、たとえば以下の論考がある。是澤博昭（2009）．教育玩具の近代—教育対象としての子どもの誕生 世織書房（pp.103-109）

³¹ 関 寛之（1926）．教育の基礎としての本能 同文館

学籍簿の様式変更（児童の「性行概評」「家庭・環境」の記述欄追加など）に伴い、文部省の求めに応じて改正の要点や記述方法を解説した『改正学籍簿精義』³²など、専門領域に関連したその他の著作もある。

この時期の寛之の研究を大きく特徴づけているのは、しかしながら何といっても、「帝国学士院研究費」を得ての、児童宗教に関する一連の研究であろう。既述の通り、東洋大学を卒業した寛之は、東京帝国大学で宗教学講座を開設していた姉崎正治の下で宗教学を学んでいたが、その姉崎の推薦を得て、計2回6年間にわたり、帝国学士院から研究費助成を受けた（第1回＝1929年～1931年の3年間；第2回＝1937年～1939年の3年間）。第1回助成における研究テーマは「日本児童の宗教意識の研究」であり、助成期間が終了した6年後の1936年に研究が完了した。続く第2回助成における研究テーマは、前回のテーマを補遺するもので、「我国における迷信の研究―児童宗教の発達と迷信との関係」であった。こちらについては助成期間が終了した5年後の1943年に研究が完了した。その後1年を経た1944年、16年の歳月をかけて完成させたのが、大著『日本児童宗教の研究』であった。刊行にあたってしたためられた彼の序文には研究のために費やされた労苦が情緒的に記されている。

「顧みれば、16か年間の過ぎた日は、感慨の連続でないものはない。その労苦は、真に心血を^{そそ}濺いで研究した体験のない人には、解るまいと思う。資料の蒐^{しゅうしゅう}集に南船北馬した旅程は、^{まこと}洵に56300キロメートルに余り、これに、天幕を張り、行囊^{こうのう}を負うた徒歩の行程を加えれば驚くべき^{きりよ}羈旅の跡である。50000分の1の陸地測量部の地図110余枚は、縦横の赤線に彩られ、資料は家の押入れに山積している。約1200枚、2300枚、800枚と、原稿を改めること三たび、終に四たびにして本論文の定稿約2000枚をまとめ上げたのである。世の義理を欠き、社交を絶ち、訪客を辞し、学校の講義をすらも億劫にして、一日として本研究に念を離さなかった。時には連

³² 乙黒武雄・関 寛之（1938）．改正学籍簿精義 東洋図書

続ほとんど12か月にわたり、日に短かきは8時間、長きは13時間、原稿を書き続け、あるいは計算尺を操り、早天から昼夜を徹して翌暁に及び、書窓に明星を迎えた日もあった。はたはたと螳螂とうろうのしきりに燈を訪れる秋夜もあった。時には神と共に紙上に筆を走らせ、思わず机上にまどろんで、醒めれば残月の淡く西に懸かっている朝も一再ではなかった。今ここに本論文を刊行する日に会し、感慨の深きを覚える。³³」

寛之がこの序文を書き終えたのは、すでに本土空襲が始まり東京大空襲を目前にした1944年9月下旬であった。

「時、世界の戦雲あわただしく、祖国の運命逆睹ぎやくとし難き際、心緒忽惶しんしょそうこうながら、日本児童宗教に関する16カ年の研究を完成し、教学の依って立つべき基礎を明示して、母国に報いんことを期する。³⁴」

そうした切迫した時代状況下にあったことを思うとき、寛之がいかにこの研究の完遂に、児童学に対する自らの使命を感じ取っていたのかがいっそうよく分かるだろう。全国に及ぶフィールドワーク、4度の手書き原稿の書き直しもさることながら、この16年間にも13もの書物を著し、さらに後述するように、教育評論家としての活動もけっしておろそかにしなかったことも考慮に入れるならば、彼の強烈な個性、すなわち強い意志と実行力を推量するに余りあるのである。

3. 2. 教育者として

東洋大学時代、寛之が担当した主たる科目は心理学であった。テキストには自著を採用している。兼任した他の学校ではこれに加えて「児童心理学」「児童学」「教育学」等の科目を担当している。「宗教心理学」と銘うった科目を担当

³³ 関 寛之 (1944) . 日本児童宗教の研究 彰考書院 (自序 pp.4-5)

³⁴ 前掲書 (自序 p.6)

Table 2 関寛之の担当科目名一覧（東洋大学時代、1924年～1945年）

担当科目名		学校名 ^{*1}	典拠資料 ^{*2}
心理学・教育学	東京女子商業学校（講師）	寛之履歴書（1926～1929年）	
家庭教育・児童学・教育行政	千代田女子専門学校（講師）	寛之履歴書（1927～1945年）	
家庭教育	実践女学校専門部（講師）	寛之履歴書（1927～1930年）	
児童心理学	昭和保母養成所（講師）	寛之履歴書（1928～1934年）	
家庭教育・児童心理学	大妻女子専門学校（講師）	寛之履歴書（1928～1945年）	
心理学（担任時数=2） ^{*3}	東洋大学専門部倫理学東洋文学科（兼任）	「東洋大学専門部卒業生教員免許無試験檢定許可申請書」（1928年4月）	
心理学（毎週授業時数=6）	東洋大学専門部（兼任）	「東洋大学教員調査事項報告書」（1931年7月15日）	
宗敎心理学・宗敎教育〔学〕	日本大学（講師）	寛之履歴書（1932～1945年）	
心理学（担任時数=2） ^{*3}	東洋大学専門部倫理学東洋文学科（兼任）	「東洋大学専門部卒業生教員免許無試験檢定許可申請書」（1933年1月18日）	
心理学概論（1週授業時数=2）	東洋大学専門部社会公民科（兼任）	「東洋大学専門部学年変更認可申請書」（1933年2月8日）	
保育学・児童心理学	中野保母養成所（学監）	寛之履歴書（1935～1945年）	
心理〔学〕（毎週授業時数=2）	東洋大学下科（専任）	} 「東洋大学教員調査事項報告書」 （1936年5月28日）	
心理学（毎週授業時数=2）	東洋大学専門部（兼任）		
児童学	東洋大学専門部社会事業科	（東洋大学創立百年史編纂委員会「編」〔1993〕、東洋大学百年史 通史編 I〔pp.803-804〕）	

^{*1} 本文附註23参照。

^{*2} 寛之履歴書に付された年数は、履歴書に記載されている科目担当期間を表す。

^{*3} これらの講義では教科書として自著『心理学原論』(厚生閣, 1927年)が使用されている。

したのは、管見では日本大学においてのみである。Table 2 は、寛之の東洋大学時代に担当した科目名の一覧である。

さて、寛之がすでに学生時代から児童研究に関心をもち、小学校の児童を対象に参与観察や実験を行っていたことは前述の通りであるが、東洋大学就職後、研究フィールドが一層充実し、その成果が本書『日本児童宗教の研究』として結実していく。その研究フィールドの一つが、東洋大学で行われた臨海学校であった。しかも寛之の場合は、単に参与観察者として臨海学校に参加したのではなかった。臨海学校の指導教授（のちに「校長」として、すなわち学生や児童に対する「教育者」として、積極的に関わったのである。自著『^{ほんきん}輓近の児童研究』³⁵、『訓練及び管理の実際に応用したる児童心理学』³⁶などで「夏期植民（Ferienkolonie の訳、「休暇聚落」とも訳される）」「林間学校」「臨海学校」の教育的意義に言及している寛之だから、この実践は、理念を実現するための好機であったに違いない。

東洋大学の臨海学校³⁷は1925年に専門学部社会事業科の学生有志によって発足したが、次年度以降、寛之がその「指導教授」（1928年は「校長」に名称変更された）に就任し（1926年）、直接指導に当たった。1926年8月6日付読売新聞朝刊には、第2回目となる臨海学校（千葉県長生郡大東岬〔現・千葉県いすみ市〕、飯縄寺で実施）に関する記事が掲載されている。

「お寺の生活／玩具の先生関教授が四十名の学童と共に…／東洋大学社会部の主催にかかる千葉県長生郡大東村大東村泉飯縄寺の学童生活一行は教授関寛之氏夫妻並に社会部学生で看護婦の資格ある石井春子（28）さん等を加えて約四十名、五日午前八時両国駅を出発した。少年少女はいずれも

³⁵ 関 寛之（1919）．輓近の児童研究 洛陽堂

³⁶ 関 寛之（1932）．訓練及び管理の実際に応用したる児童心理学 文化書房

³⁷ 東洋大学の臨海学校については、東洋大学創立百年史編纂委員会（編）による以下の資料を参照。①『東洋大学百年史 通史編Ⅰ』（1993年）（pp.897-905）、②『図録東洋大学100年』（1987年）（pp.50-51）、③『東洋大学百年史 資料編Ⅰ下』（1989年）（pp.235-239）

九歳から十五歳までで十八日まで研究的に夏の規律ある寺院生活を試むる
よし
由³⁸⁾

臨海学校は1935年まで毎年開催されたが、1936年以降は廃止になったようである。毎年8月に2週間から3週間にわたり、千葉県や静岡県等で実施された。児童数は多い時で約100名、少ない時で30余名、引率する教務員のうち大半は学生であり、学生の実地研修を兼ねていた。

従来の臨海学校が「児童の保健及び治療を目的としていた」のに対し、寛之が主導した臨海学校は「児童の身体及び精神の養護」をも目的に加えていた。1935年の「東洋大学臨海学校案内」には、「…特に児童の精神の発育を助け、良習を^{じゅんち}馴致し、自治心を養い、親愛の情を増し、心情の浄化に努めていること」が臨海学校の特色として挙げられている。日課には朝会、学課指導、水泳、自由時間（散歩等）、身体測定（隔日実施）、夕食後の団欒会（お話し・遊戯・ラジオ鑑賞等）が組み込まれ、期間行事として遠足、運動会、地曳網体験等が行われた。

臨海学校で児童らと寝食を共にしつつ児童の身体的・精神的変化を調査した寛之は、調査結果を『児童研究所紀要』に報告している（1927年）。そこには、2週間の臨海学校が終了した11日後に参加児童とその保護者に行った事後調査も含まれており、臨海学校に参加した児童の間に、①「良習馴致」（規則正しい生活、お手伝い等）、②「自治心養成」（自分の持ち物を整理し大切に等）、③「性向転化」（内気な性格から快活な性格に変化した等）、④友情涵養、等が「臨海学校の心理的良結果」として認められたことが報告されている³⁹⁾。寛之にとって、約10年間続いたこの臨海学校の指導は、教育者としての充実感を大いにもたらすものとなったであろう。

³⁸⁾ 読売新聞 1926年8月6日朝刊、(p.7)

³⁹⁾ 関 寛之（1927）. 臨海学校の身体的・精神的効果の研究 児童研究所紀要 10, (pp. 777-820)

3. 3. 教育評論家として

寛之はまた、児童心理学や玩具の専門家として、新聞や雑誌、ラジオ出演等の活動も多かった。

まず玩具の専門家としての顔であるが、高島平三郎から玩具研究を引き継ぎ、『父母と教師のための玩具と教育』⁴⁰、『玩具と子供の教育』⁴¹、『我子のおもちゃ』⁴²を著していたこともあり、一般には「おもちゃの研究者」として知られていたようである。たとえば1925年3月15日付の読売新聞朝刊には、銀座の松坂屋で開催された「おもちゃの展覧会」で相談コーナーを担当したことが報道されているが、その中にそのような表現が見られる。

「澄宮さま始め各官家からも出品しおもちゃの展覧会／おもちゃの展覧会が十七日から二十六日迄銀座の松坂屋六階で開かれ開期中おもちゃの研究者として有名な東洋大学教授関寛之氏が同所に相談所を開いて子供もつ親たちの相談相手になるそうだ（…中略…）尚計画は玩具製造の教育的改善、教育的優良玩具の奨励、家庭に対し玩具選定の眼識を高めることこの三つを主眼として、教育技術衛生経済の立場からおもちゃをえいじ幼児、少年少女、児童の性質などに区別しどんな子供にどんなおもちゃがよいか、一見だれでもわかるよう実物の収集をするそうだ⁴³」。（下線筆者）

さらに1927年1月4日付読売新聞朝刊には、「三千年前のおもちゃ／今にもまけぬりっぱなもの／動く人形もある／エジプトの子供はむかしからボール遊びが大好き／東洋大学教授 関寛之氏（談）」の見出しで、エジプトの玩具を紹介する談話が掲載されている⁴⁴。一般向け雑誌では、「子供に与えて良い玩具と悪

⁴⁰ 関 寛之（1919）．父母と教師のための玩具と教育 洛陽堂

⁴¹ 関 寛之（1925）．玩具と子供の教育 廣文堂書店

⁴² 関 寛之（1926）．我子のおもちゃ 文化生活研究会

⁴³ 読売新聞 1925年3月15日朝刊，（p.7）

⁴⁴ 読売新聞 1927年1月4日朝刊，（p.3）

い玩具」(『主婦の友』1926年2月号⁴⁵)、「玩具の与え方と選び方」(『婦女界』1936年6月号⁴⁶)といった寄稿およびインタビュー記事が掲載されている。またラジオ放送でも番組「家庭講座」(東京放送局 JOAK)に出演し、「玩具の選び方と与え方 第一講」(1929年9月6日放送)⁴⁷、「玩具の選び方と与え方 第二講」(1929年9月13日放送)⁴⁸を担当した。

さらに寛之は、良質玩具の普及活動に加え、教育評論家としても幅広く活動した。一般向けに書かれた教育指南書である『児童教養の考へ方』⁴⁹、『我子の教育』⁵⁰を著したり、新聞への寄稿やラジオ出演もこなしたりしている。これらのうち、雑誌『婦女界』(1910年創刊～1943年休刊；同文館〔のち婦女界社〕)での活動に注目してみよう。

彼の名は前述の『主婦の友』のほか、『女性改造』『婦人倶楽部』等の雑誌にも見られるが、中でも『婦女界』での活動が最も長く、児童心理学の専門家としてインタビューを受けたり、座談会の司会を務めたり、教育相談コーナーを担当したりしている。掲載号は1929年から1940年までに及ぶが、集中的な掲載がみられるのは1936年から1939年までの4年間である。この4年間だけでも記事は62本にのぼり、1号につき2～3本の記事が掲載されることも少なくなかった。Table3は、この時期における『婦女界』での活動の概要をまとめたものである。また1937年より、読者から寄せられた質問に個別に回答する「教育問答」「読者相談(教育相談)」のコーナーでの活動もみられるため、これらは別途、Table4に示した。これらの記事タイトルをみると寛之がいかにも、家庭教育上のありとあらゆる課題に答えていたかが分かるだろう。主に幼児期から児童期にかけての運動発達、認知発達、社会性発達の各領域にわたる全般的な相談活動を行っていた。とくに1937年以降の3年間は、「教育問答」と称する

⁴⁵ 関 寛之(1926)．子供に与えて良い玩具と悪い玩具 主婦の友, 10(2), (pp.168—178)

⁴⁶ 関 寛之(1936)．玩具の与え方と選び方 婦女界, 53(6), (pp.217—224)

⁴⁷ 読売新聞 1929年9月6日朝刊, (p.10)

⁴⁸ 読売新聞 1929年9月13日朝刊, (p.9)

⁴⁹ 関 寛之(1927)．児童教養の考へ方 考へ方研究社

⁵⁰ 関 寛之(1937)．我子の教育 婦人界社

Table 3 『婦女界』誌上での関覧之の主な教育評論活動①：インタビュー・座談会

出版年/掲載記事数	主なタイトル	巻(号)/頁数
1996年/11本	新入学一年生の導き方	53 (4) / 10頁
	子供の成績を良くする導き方	53 (5) / 9頁
	必ず良い子になる夏休み中の導き方	54 (1) / 7頁
	子供の読みもの、選び方・与え方	54 (3) / 7頁
	子供の褒め方・叱り方	54 (4) / 7頁
	幼稚園・小学校への入学準備法	54 (5) / 7頁
	中等学校への受験準備秘訣	54 (6) / 8頁
	思春期の子供の導き方	55 (1) / 7頁
	必ず成功する子供の職業の選び方	55 (3) / 6頁
	子供の金銭教育はどうするか	55 (4) / 6頁
1997年/24本	独り子を良い子に育てるコツ	55 (6) / 4頁
	神経質な子供の導き方	56 (1) / 5頁
	愛児が天才か低能かを見分ける法	56 (2) / 8頁
	愛児のいたずらと喧嘩の扱い方	56 (3) / 7頁
	子供の興味を良く導く法	56 (4) / 7頁
	算術の不得手な子を上手にする法	56 (5) / 7頁
	愛児のお稽古ごとの導き方	57 (1) / 8頁
	早熟な子を眠らせぬ導き方	57 (2) / 5頁
	時局と子供の導き方	58 (4) / 5頁
	学齡期前の子供にはどんな玩具と絵本がよいか	59 (4) / 4頁
1999年/11本	数人の子を育てた方々と小児科医・児童教育家が上手な育児法と躾け方を語る会 (座談会)	59 (6) / 19頁

(期間中全62本の中から、多岐にわたるテーマが扱われていることが分かるように選択した。)

コーナーを担当し、読者から寄せられた個別の質問に丁寧に回答するなど、実践的な活動も行っている (Table4)。

Table 4 『婦女界』誌上での閑寛之の主な教育評論活動②：読者からの教育相談

出版年	タイトル (相談内容)	巻(号)
1937年	赤ちゃんをいじめる子／お伽噺に疑問を持つ子／気憶れのする子	55 (5)
	お父さんの子供／偏食の子供／通園を嫌う子	55 (6)
	左利きの子／神様を軽蔑する子／学校の選択	56 (1)
	父なき子の教育／乱暴な女兒／臨海学校行きについて	56 (2)
	盗癖を治すには／漫画の好きな子	56 (3)
	受験準備を無視する夫／濫読で困る子／音楽家にすべきか	56 (4)
1938年	欲心のない子／高女か実科か	56 (5)
	入学を怖れる子／模擬試験は受けさすべきか	56 (6)
	子供の転校問題／度胸をつけるには	57 (1)
	兄弟の差別問題／耳の遠い子／入学試験に失敗の場合	57 (2)
	愛児の将来	57 (3)
	帰国か否か／休学中の子供	57 (4)
	入学前の勉強	57 (5)
	乱暴な子の玩具／里子へ出した子	57 (6)
	落ち着きのない独り子	58 (1)
	成績のよくない中学生／弱虫の子	58 (2)
	子供の献金問題／弱い中学生と上級学校	58 (3)
	数学好きの子の将来	58 (4)
低能の疑いある子	58 (5)	
虚栄心の強い子の導き方	58 (6)	
1939年	癩癩からきた低能児	59 (1)
	忍耐のない病弱児	59 (3)
	神経質で短期な子供	59 (4)
	知能発達の遅い子	59 (5)
	学校嫌いの児	59 (6)
	母親を馬鹿にする子供達／課外本の選択	60 (1)
	特殊施設の学校／上級学校の選択	60 (2)
	内気で強情な子の導き方	60 (6)
	本ばかりよみたがる子	60 (7)

これら記事内容の詳細な分析は別稿に委ねなければならないが、ここでは特筆すべき点のみを指摘しておきたい。

まず第一に、寛之の宗教性発達研究の根底に流れる宗教観が、いわゆる大衆

雑誌の記事の中にも滲み出ている点である。たとえば、『婦女界』56巻1号「教育問答」コーナーに、6歳の男児が親戚の大学生の影響を受けて神仏を信じないがどうしたらよいか、という母親からの質問が寄せられている。寛之はこれに対して、「宗教の中心は神仏の存否を確かめたり、神仏を礼拝したりすることよりも、運命を知り、宇宙万象を統制する神秘力に敬虔の情を寄せ、慈悲（愛）と感謝とを以て世に処し、自己を統一し、生命を浄化する所にある」と答え、「有神論を強制」しないよう勧めている⁵¹。また、『婦女界』57巻6号では、事情あって里子に出していた8歳の女兒を引き取ったが接し方が分からない、という質問に対して、子の歓心を買おうとして「教育技術の小細工を弄すること」はやめるよう助言する。そして、「教育の中心は愛であり、…誠心誠意神に誓い、仏に帰し、天を仰ぎ地に伏し、過去の母としての務めの出来なかったことを神明に対して取り返すべく…神仏の恵の心を以て本人の上に臨ま^{びん}れたい」「人間の利己的な感情を棄て、一行一動を観るにつけ、不愆を増すよう神仏の限りない大慈大悲の心持を以て導いてごらんなさい」と説いている⁵²。ここには、宇宙を統べる神秘的な力に対して敬虔の情をもち、自らには生命の浄化を目指し、他者には慈悲の心をもつという、寛之の宗教観が滲み出ているように思われる⁵³。

第二に、日中戦争（1937～45年）という時代状況下の影響である。『婦女界』58巻4号に寛之は、「時局と子供の導き方」と題する記事を寄稿しているが、これは『国体の本義』の刊行（1937年5月）、文部省教学局の設置（同年7月）など、戦時体制に対応した教育統制が強化されていく時期と重なる。本記事で寛之は、時局に即応した教育を「小乗教育」、普遍的な人間性を土台にする教育を「大乘教育」と呼び、後者の立場から「この戦争という機会をとらえて子供には…祖国愛、同胞愛、人類愛」を教えるべき、と説く。そして具体的に、靖

⁵¹ 関 寛之（1937）．子供の教育問答 婦女界，56（1），（pp.158-159）

⁵² 関 寛之（1938）．教育問答 婦女界，57（6），（pp.178-179）

⁵³ この記事で、寛之は「子は母がこれを育てるのが人生の自然であり常則であり…この常則が破られた所に、教育上の無理が現われることは、已むを得ないこと」（前掲書，p.179）と、里子について否定的である。これについては、本文1．において言及したように、里子に出されていた自身の兄・衛との経験が関与しているであろう。

国神社を含む神社参拝，学業への勤労，節約，貯蓄および献金，出生軍人や戦死者遺族への慰問，時局の捉え方について，それぞれ子どもにどのように語っていけばよいかをアドヴァイスしている。戦時下の子ども教育についてこれほど具体的に論述したものは多くない⁵⁴が，寛之が教育者としてどのような立場をとっていたのかを示すものとして記憶しておく必要があるだろう。

4. 帰郷後の寛之（1945—1963年）

こうして東京で活躍し，文字通り「身を立て名をあげ」た36年間も，やがて終わりを迎えた。切迫した戦時下の状況において寛之は，最後の大仕事である『日本児童宗教の研究』を出版する。初版の発行は1944年11月25日，まさに東京大空襲が開始された直後であった。自身の研究の集大成を出版し終えたのち寛之は，翌1945年4月，戦争疎開という形で，小浜に帰郷した。彼の帰郷のいきさつに関する記録は管見の限りでは見当たらない。

地元に戻ってからの寛之は戦後，実家の網元としての仕事を受け継ぎつつ，長崎大学，純心短期大学，玉木女子短期大学などで教鞭をとりながら，長崎県農地委員会委員，長崎県公安委員会委員委員長，等の仕事を引き受けたりして，積極的に地元への貢献を行った。

地元への貢献で忘れてはならないのは，出身校の校歌を作詞したことである。寛之は，自身が卒業した富津尋常小学校を前身にもつ富津小学校の校歌の作詞を担当した⁵⁵。校歌制定は1955年，寛之が65歳の時であった。さらに，制定年は不明であるものの，小浜中学校の校歌の作詞も手掛けている⁵⁶。実家が古くか

⁵⁴ 戦時体制下の子どもに関するまとまった論述として以下の著作がある。関 寛之（1943）. 子どもの生活指導 戦時生活叢書4 国民生活科学化協会（編）北光書房（pp. 44-73）

⁵⁵ 富津小学校の歴代 PTA 会長に「関 巖」の名が見られ，寛之の養子・巖氏とみられる。1967年から1970年まで務めた。小浜町史談編纂委員会（編）（1978）. 小浜町史談 小浜町（p. 318）なお，富津小学校は2019年3月をもって閉校となり，同年4月より小浜小学校に統合されている。

http://www.city.unzen.nagasaki.jp/info/prev.asp?fol_id=33357（2020年1月24日閲覧）

⁵⁶ 小浜町史談編纂委員会（編）（1978）. 小浜町史談 小浜町（pp. 324-326）

らの網元であり帰郷後に家業を受け継いだこと、東京で活躍した知識人であったことから、地元の名士として迎えられたことは想像に難くない。

ただ、帰郷後の寛之は、全くと言ってよいほど論文執筆活動を行っていない。唯一の例外は、1949年の「児童遊戯の心理と教育」と題する雑誌論文⁵⁷である。特集「遊戯」の一編として掲載されたもので、児童遊戯の種類、遊戯の発達にふれながら、遊戯の教育上の重要性を説いている。論文末尾には「元東洋大学教授」の肩書が記されている。寛之自身は、帰郷後も何らかの研究、ないしは執筆活動を予定していたであろうが⁵⁸、この論文以降、管見では研究上の活動は行われなかった。

その後寛之は、病を得て、1962年12月23日、72歳で死去した。それはまさに、二度の帝国学士院研究費を得て研究を進め、戦争疎開直前に出版した『日本児童宗教の研究』によって東京大学より文学博士号を授与された年のことであった（3月31日付学位授与）。

おわりに

以上、戦前に活躍した児童学者・関寛之の生涯を素描してきた。彼の生涯は、幼少期から青年期にかけての18年間、36年間におよんだ東京での学究生活、そして戦争疎開で帰郷し生涯を閉じるまでの17年間の、3期に区分できる。そのうち、自著の初出版（1918年）から戦争疎開までの期間と、疎開後の期間とは、研究面では明らかに断絶がみられる。その経緯を示す資料は今のところ見つかっていない。

とはいえ、36年間の東京生活の中で寛之は、研究者としても、教育者として

⁵⁷ 関 寛之（1949）．児童遊戯の心理と教育 社会と学校，3（1），19-25.

⁵⁸ 向野康江が1989年8月に実施した関家の納屋の調査では、「数百冊以上におよぶ関寛之の蔵書」が確認されている。向野康江（1994）．上掲書，巻末資料〔資料10-3〕 また、筆者が2018年7月に関家を訪れた際にも、向野論文に掲載された写真に写っているものと同じ長持（寛之の蔵書を納めた長持）を確認している。そこには帝国学士院研究費助成により購入された専門書も多く含まれていた。貴重本を戦禍から守るために故郷に持ち帰ったものであり、研究の再開を意識していたことの証左となろう。

も、また教育評論家としても大いに活躍したといえるだろう。研究者としては、玩具論の体系化、児童学の体系化に加え、児童期の宗教性の研究領域でそれぞれ重要な貢献をなした。教育者としては、大学での講義にとどまらず、臨海学校の校長を務めながら、児童と寝食を共にしつつ指導にあたることもあった。また教育評論家としては、新聞への寄稿、ラジオ番組への出演のほか、家庭向け雑誌にも積極的に寄稿し、誌上での教育相談活動も行っていた。その意味では、戦前に活躍した知識人の一人であったといっても過言ではないだろう。

寛之は日本における宗教性発達研究の先駆者でもあったが⁵⁹、彼が児童宗教に関心をもつに至った動機（2. を参照）だけでなく、彼自身の宗教観が吐露されている資料をも見出すことが出来たことは、一つの成果といえよう。そこでは、特定の宗教への信仰というよりは、「宇宙万象を統制する神秘力」に対する「敬虔の情」を根底とする宗教観が見出されていた（3.3. を参照）。

今後の課題としては、彼が戦後（帰郷後）、研究活動を停止してしまった理由を探ること、また、さらに資料を収集して、彼の「人物像」のみならず、その人脈のネットワークをより明確に浮かび上がらせること、が挙げられよう。そのうえで、筆者の関心テーマに即していえば、日本の宗教性発達研究の流れの中に寛之を明確に位置づけ、研究史として構築していくことにしたい。

⁵⁹ 関 寛之の宗教性発達理論の概要については以下の拙論を参照。西脇 良（2012）. 関寛之の宗教性発達理論について 南山神学, 35, 135-156.